

八巻古窯群の木葉状線刻 (木葉圧痕) について

● 池本正明

東浦町八巻古窯群では、碗の内底部に木葉状線刻（木葉圧痕）を施す事例が40点以上出土している。本稿ではこれらが同一の目的で施されたものと仮定し、資料の性格を考察する。

まず、史料などの検討から、古代には葉椀・葉盤などと呼称された植物質の容器が祭器として使用されていた事を指摘し、木葉状線刻（木葉圧痕）を施す碗をこうした祭器の系譜を引くものと想定する。また、八巻古窯群に類似した資料がほぼ同時期の山茶碗窯にも散見できる事から、こうした祭祀が当地域においてやや広域に存在していた状況も想定する。

1. 八巻古窯群の概要

八巻古窯群は知多郡東浦町に所在する碗と小碗を多量に焼成するいわゆる山茶碗窯である。発掘調査は2次に渡って実施されている。1次調査は昭和36（1961）年で、愛知県教育委員会により3基の窯体が検出されている。2次調査は平成22（2011）年で、愛知県埋蔵文化財センターによるもので、1次調査で確認された窯体にとまなう灰原の調査である。

2. 資料の観察

八巻古窯群の出土遺物で特徴的となる資料に図1・2に集成した線刻（圧痕）資料がある。報告書（池本他 2016）の挿図を転載したため、遺物番号は報告書と同様となる。器種は椀に限定できる。出土位置は調査区のほぼ全域だが、基本的には001SU・003SUに伴う資料で、1・3号窯の製品と思われ、その他は混入と理解されている。時期は1b型式期～2型式期で、12世紀中頃となる。

線刻（圧痕）の形状は図1・2（391・1次-161）などが説明的で、中央の線と斜方向に伸びる線の組み合わせが基本形となるが、時に外

周線も付加され、これが鋸歯状となる事例も含まれる。以下、これらの形状が木葉に類似する事からこれらを木葉状線刻（木葉圧痕）と仮称し、各部位に主脈・側脈・細脈の名称を使用する。

これらが線刻か圧痕か判断に苦しむ場面も存在する。線刻ならば、端部が細い工具により非常に弱い筆圧で施され、いずれも一息に刻まれている。また、側脈が主脈を突き抜ける事例は存在せず、相応の熟練が想像できる。一方では、線刻（圧痕）の周囲がわずかではあるが片切彫状となる事例も存在し、特に葉縁の鋸歯部分に現れる事が多い。これは筆圧のわずかな変化に原因すると思われる。また、中央脈と側脈の周辺にも細脈が観察できない事例も多い。以上の状況から、図1・2の404～406を除く全てを線刻と判断した。一方、線刻か圧痕かの判断に苦しむ資料は、線刻は木葉を中央脈・側脈・葉縁のみで表現しているだろうと想定し、特に細脈の有無で判断している。図1-404～406は圧痕と考えたい。

これらを線刻と圧痕に区分すると、線刻資料は2次調査で26点、1次調査では18点、圧痕資料は2次調査で3点、1次調査で1点となる。遺物番号は報告書を踏襲したが、アラビア数字のみの表記が2次調査資料で、1次と付けたものが1次調査資料となる。遺物番号の末尾には

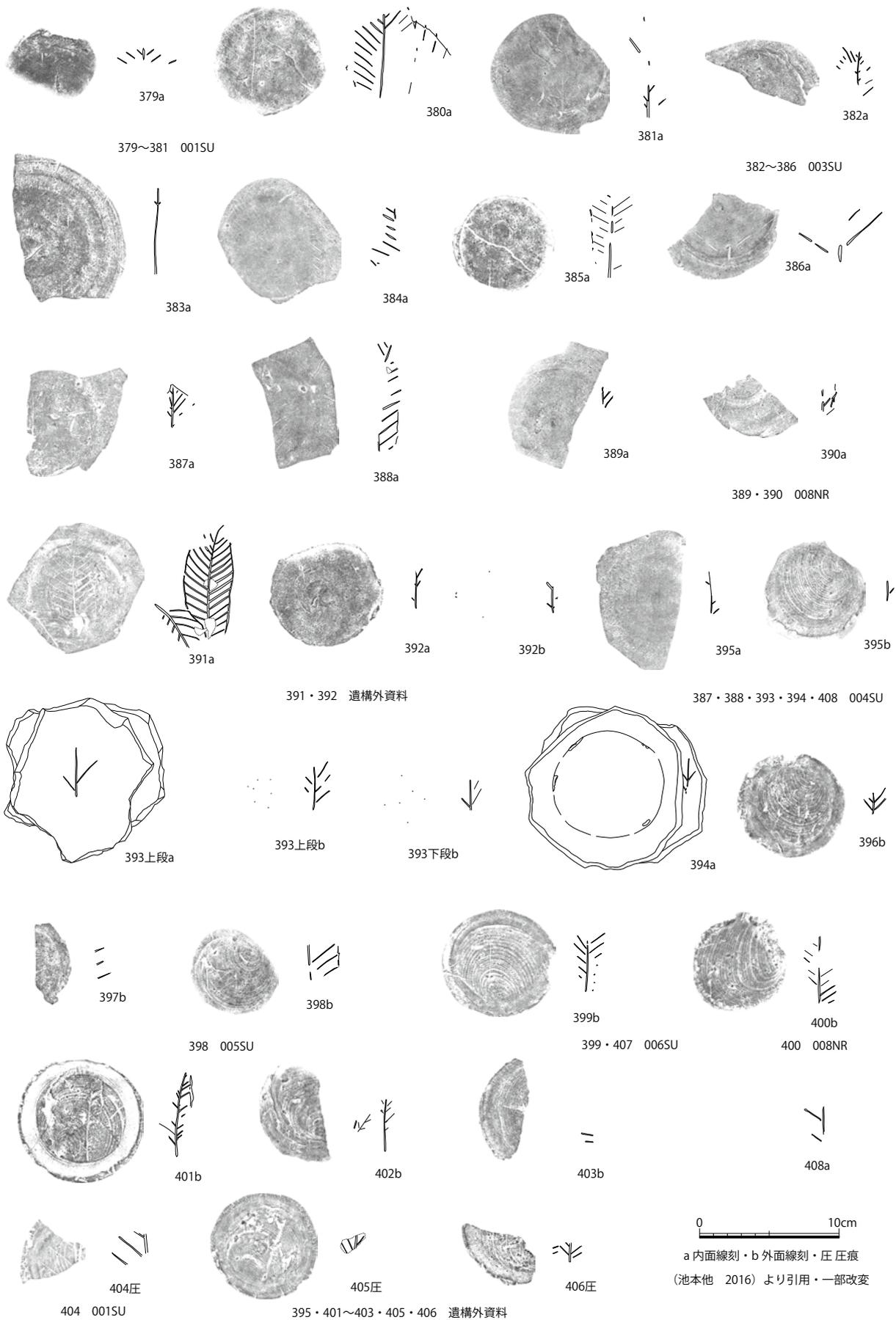


図1 八巻古窯群 2次調査の木葉状線刻・圧痕 (1:4)

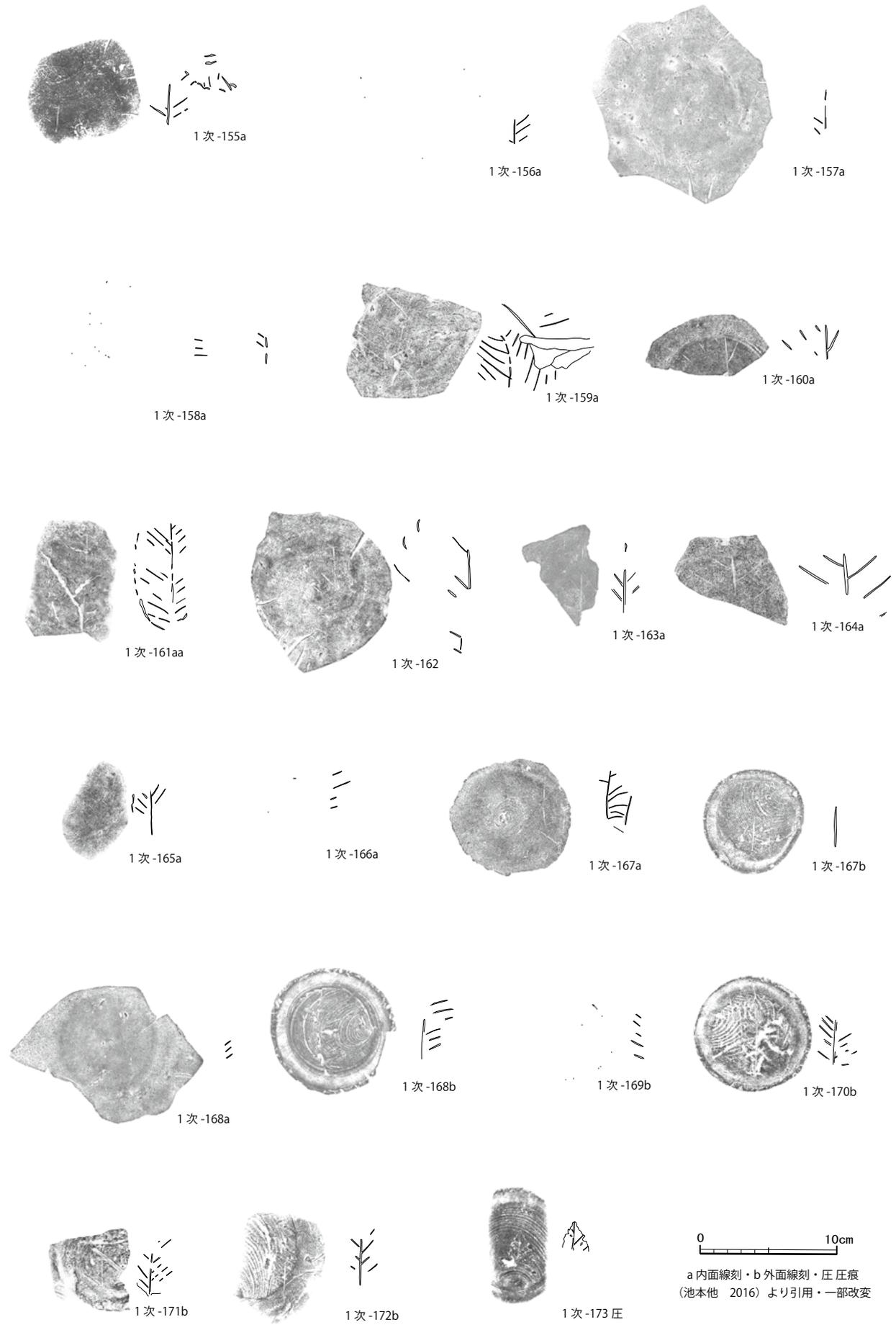
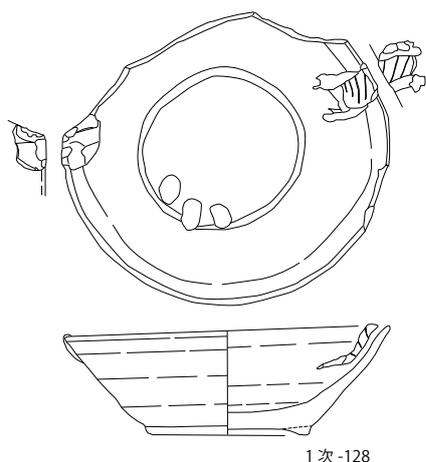


図2 八巻古窯群 1次調査の木葉状線刻・圧痕 (1:4)



0 10cm
(池本他 2016) より引用

図3 補修部分に木葉圧痕をもつ碗 (1:4)

内底部の線刻を「a」、外底部を「b」、圧痕（全て外底部）を「圧」と付した*。

次に部位に注目する。線刻を内底部に施すものを線刻a類(379～391・393上段・394下段・408・1次-155～160・1次-162～166)、外底部に施すものを線刻b類(396～398・400～403・1次-169～172)、外底部と内底部の両方に施すものを線刻c類(392上段・395・1次-167・1次-168)と区分する。数量では線刻a類が多数派となる。これらは一葉を中央に刻むものが大半で、ややはずれた(394)は例外となる。二葉を表現する事例も存在する(380・391・1次-155・1次-159)。線刻b類では線刻が高台貼付以前の外底部周囲に及ぶ例(400・1次-172)もある。なお、圧痕を線刻と同様に分類すると全てb類となるが、(図3 1次-128)は口縁部付近の補修部分にのみ確認できる。

3. 近接地域の木葉状線刻（木葉圧痕）

山茶碗の木葉状線刻（木葉圧痕）は八巻古窯群以外の山茶碗窯でも散見する事ができる。詳細は表1にまとめるが、以下に資料を概観する。

・名古屋市長廻間1号窯(図4-A～F、七原他1993)

名古屋市守山区大字上志段味字生下りに所在する。調査は昭和45(1970)年に実施され、報告書は名古屋市教育委員会により平成5(1993)年に刊行されている。窯体は3基確認されたが、当該の資料は碗が5点、壺が1点で1号窯に伴う。前者は線刻a類**で、A～Cが一葉、D・Eは二葉で、中央脈・側脈で表現する。Bは不鮮明だが葉縁も表現されている。後者も線刻で、肩部に中央脈・側脈で表現する一葉が確認できる。時期は山茶碗第3型式で、11世紀末～12世紀初頭。

・瀬戸市長根5号窯(図4-G、宮石他1970・佐野1998)

瀬戸市原山町7丁目に所在する。調査は昭和41・42(1966・1967)年に実施され、報告書は愛知県住宅供給公社・瀬戸市教育委員会により昭和45(1970)年に刊行されている。当該の資料は再整理報告(佐野1998)に掲載されている碗が1点である。実測図を観察すると、線刻a類で中央脈・側脈で表現する一葉を中央に刻む様子が観察できる。時期は山茶碗第5型式で、12世紀後葉～13世紀初頭。

・大府市別岨古窯群(図4-H、池本他2013)

大府市共和町に所在する。調査は平成22(2011)年に実施され、報告書は愛知県埋蔵文化財センターにより平成24(2013)年に刊行されている。窯体は001SY～003SYの3基が確認されたが、001SYの製品と思われる。当該資料は碗が1点である。線刻a類で中央脈・側脈で表現する一葉を中央に刻む。時期は知多1b型式期で、12世紀中頃。

・田原市惣作14号窯(図4-I、河合1976)

田原市大草町惣作に所在する。調査は昭和50(1974)年の第3次調査で実施され、報告書は田原町教育委員会により昭和51(1976)年に刊行されている。当該資料は碗が1点で、報告書には「細線でへう描き」されたと記されている。写真図版を観察すると、a類で中央脈・側脈で表現する二葉を中央に刻むと思われる。

* 線刻と圧痕の区別が不鮮明な場合は線刻に含めた。393は溶着資料で、実測後に剥離して上段の外底部と内底部、下段では内底部に線刻が観察できた、と報告されている。

** この資料は全て圧痕とする意見もあるが、本稿では線刻と考えている。

表1 近接地域の木葉状線刻（木葉圧痕）

番号	遺跡名(所在地)	器種	時期	特記事項	文献
A	長廻間1号窯(名古屋市)	碗	3型式	1類・輪花	七原他 1993
B	長廻間1号窯(名古屋市)	碗	3型式	1類・輪花	七原他 1993
C	長廻間1号窯(名古屋市)	碗	3型式	1類・輪花	七原他 1993
D	長廻間1号窯(名古屋市)	碗	3型式	1類・輪花	七原他 1993
E	長廻間1号窯(名古屋市)	碗	3型式	1類	七原他 1993
F	長廻間1号窯(名古屋市)	壺	3型式	外面肩部	七原他 1993
G	長根5号窯(瀬戸市)	碗	5型式	1類	佐野 1998
H	別岨古窯群(大府市)	碗	1b型式期	1類	池本他 2013
I	惣作14号窯(田原市)	碗	2a型式期	1類・二葉	河合 1976
J	大谷洞44号窯(多治見市)	碗	窯洞1～白土原1	1類	田口他 2001
K	大谷洞3号窯(多治見市)	碗	白土原1	1類	田口他 2001
L	大谷洞3号窯(多治見市)	碗	白土原1	1類	田口他 2001
M	明和14号窯(多治見市)	碗	明和1	1類・一葉以上、線刻は中心より外れる	山内 1990a
N	明和22号窯(多治見市)	鉢	明和1	外面	山内 1990a

なお、この資料は上記した長廻間1号窯（七原他 1993）の報告書中に長廻間1号窯資料に類似する線刻資料として紹介されている。時期は渥美2a型式期で、12世紀後半。

・多治見市大谷洞44号窯（図4-J、田口 1976）

多治見市北小木町字大田洞に所在する。調査は平成9（1997）年に実施され、報告書は多治見市教育委員会により平成13（2001）年に刊行されている。当該資料は碗が1点で、中央に中央脈・側脈で表現する一葉が確認できる線刻a類となる。時期は窯洞1号窯式で、13世紀前葉。

・多治見市大谷洞3号窯（図4-K・L、田口他 2001）

多治見市北小木町字大田洞に所在する。調査は平成9（1997）年に実施され、報告書は多治見市教育委員会により平成13（2001）年に刊行されている。当該資料は碗が2点で、いずれも線刻a類で中央に中央脈・側脈で表現する一葉が確認できるが、Lは部分的に葉縁も表現している可能性を持つ。時期は白土原1号窯式で、13世紀前半。

・多治見市明和14号窯（図4-M、内山 1990）

多治見市明和町7丁目に所在する。調査は3次に渡って実施されたが、本窯は昭和60（1985）

年の3次調査に含まれる。報告書は多治見市教育委員会により平成2（1990）年に刊行されている。当該資料は碗が1点で、線刻a類となる。中央脈・側脈・葉縁で表現する一葉以上が確認できる。時期は明和1号窯式で、13世紀中葉。

・多治見市明和22号窯（図4-N、内山 1990）

多治見市明和町9丁目に所在する。調査は3次に渡って実施されたが、本窯は昭和60（1985）年の3次調査に含まれる。報告書は多治見市教育委員会により平成2（1990）年に刊行されている。当該資料は鉢の口縁部片が1点で、木葉を中央脈・側脈・葉縁で表現する線刻を外面に施す。時期は明和1号窯式で、13世紀中葉。

以上の資料は表1にまとめた。基本的には器種は碗で、線刻a類となるが、長廻間1号窯の壺と明和22号窯の鉢は例外的と言える。时期的にはほぼ12世紀に納まるが、多治見市の資料は13世紀まで下がる*。線刻のタッチは八巻古窯群資料と同様に細く浅いものが多いが、明和14号窯（M）と明和22号窯の（N）は太く

* 東濃窯のいわゆる北部系山茶碗には、「オロシ碗」と呼ばれる、内面に斜格子状・放射状に線刻を鋭利な工具により施す器種が存在するが、これらは「刻線自体がオロシ目としての機能を有していた可能性」（山内他 2001）が想定されている。オロシ目の一部には「綾杉文状」の一群があり、その外郭を沈線で囲む事例も存在する（山内 1990）。が、これらはここで主題とする木葉状線刻には含めていない。

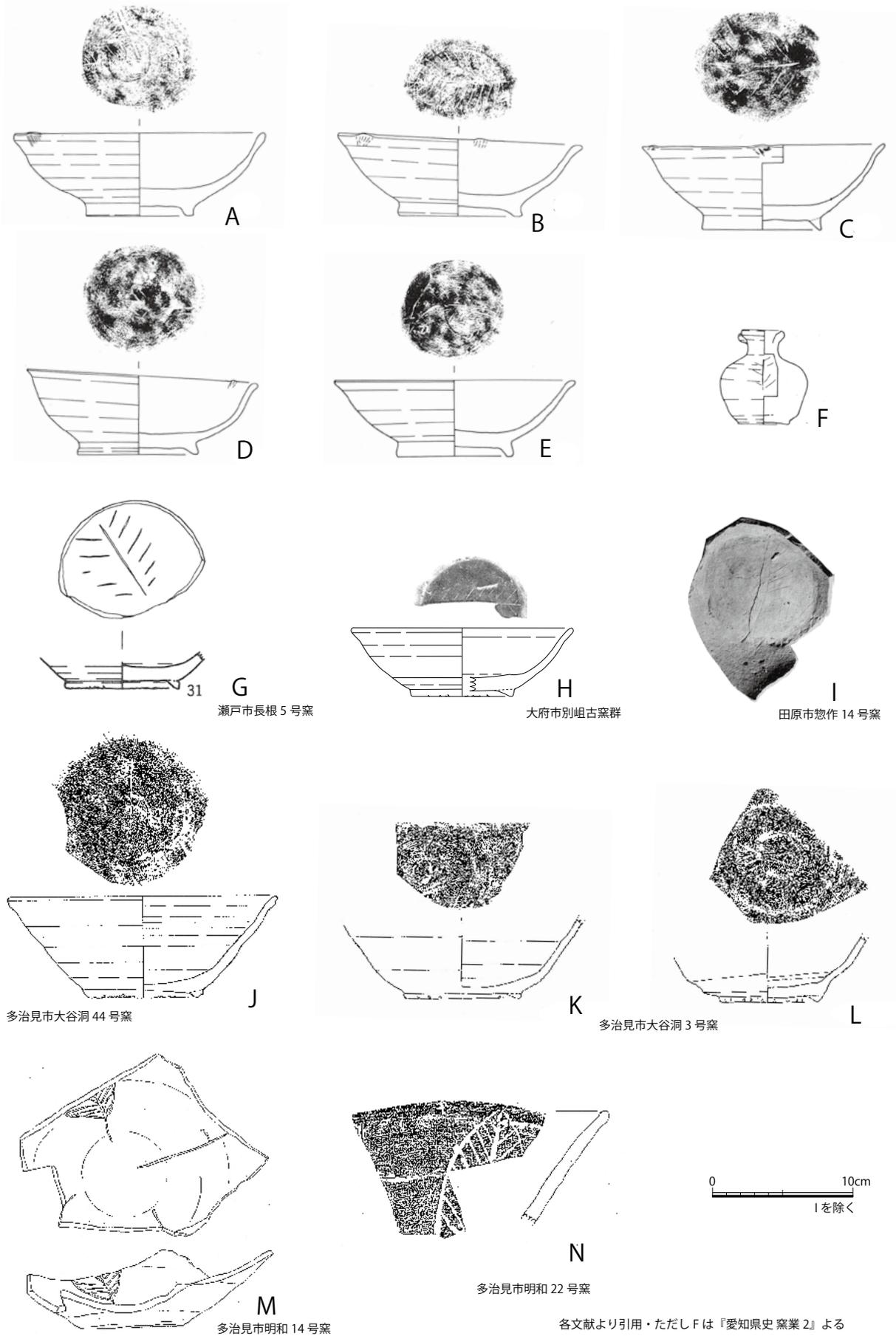


図4 周辺地域の木葉状線刻

強い筆圧となる。前者は線刻 a 類だが、やや外れた位置となり、後者は器種も鉢で、線刻を口縁部付近の外面に施すなどやや様相が異なる。

周知の様に、山茶碗の線刻は数量的には乏しい。しかも外底部に施される事が一般的で、八巻古窯群資料の様に内底部に類似する内容が多数確認できる事例は乏しい。こうした状況から、これらが類似する用途を持つものと想定できる。そして、多数派となる a 類がその基本形と考えられ、線刻する位置に意味を想定しておきたい。底部の内外の c 類と外底部の b 類は少数派となり、a 類が形骸化した姿だろうか。

こうした資料は、図 1～4 に見る様に不鮮明である場合も多い。さらにこれが高台貼付以前の外底部周囲に及ぶ例 (400・1次-172) では、一部が高台により覆われる。こうした状況から、これらが装飾とは別の目的で施された可能性が高く、木葉を線刻 (圧痕) する所作に意味を想定しておきたい。このため、これが不鮮明であっても問題はないのであろうか。なお、この考えにおいては木葉圧痕も木葉状線刻と同列に位置づける事ができる。

4. 文献史料の検討

吉岡康暢氏は木葉状線刻 (木葉圧痕) を施す供膳具を、「柏や朴などで作った「葉碗・葉盤」に御饌を盛る、いわゆる炊葉の観念を前提に製作された」と指摘し (吉岡 1994)、『延喜式』卷第三十五 大炊寮「宴會雜給」の

其飯器参議已上並朱漆碗。五位以上葉碗。命婦三位以上藺筥。加筥。五位以上命婦「並」陶碗。加盤。大歌。立歌。國栖。笛工並葉碗。

五月五日青柏。七月廿五日荷葉。餘節干柏。の記述などを引用している。

高橋輝彦氏も同様に、葉碗などの用例に注目する過程で吉岡氏の引用部分に対して、葉碗が大嘗祭の用具として登場する事、末尾の注から葉碗が植物の木葉を使用した事を指摘している (高橋 1997)。高橋氏はさらに柏の葉に菓子などを盛る実例として、『延喜式』卷第三十二 大膳上「雜給料」にも注目している。

右依前件。其五位已上食竝盛筥。菓子雜肴盛以干柏。結以木綿

また、葉碗については『延喜式』卷第七 踐祚大嘗祭の

並居葉碗。久菩互。覆以笠形葉盤。比良互。似笠形。

も引用し、この他に、『和名類聚抄』の調度部の祭祀具に「葉碗」は「葉手」とともに記載されると指摘する。なお、これらは史料によって様々に表記されるが、以下は葉碗・葉盤で統一する*。

次に、葉碗・葉盤の実物として『兼霞堂雜録 (安政 3 (1856) 年)』、『晴翁漫筆 (安政 5 (1858) 年～安政 6 (1859) 年)』に注目したい。前者には春日祭の記述があり、樹皮を付けたままの枝を藤葛で結わえた「神供の種々を並ぶる案 (図 5-1)」とその容器が描かれるが、この中には榲御膳とされる木葉製の容器 (図 5-2) が含まれている。これは「榲葉にて筥の如くに折て、細き竹にて縫製す」との説明が付く。本文には、

榲葉を八枚円く重ねて、細き竹にて編つけ、盆のごとくに製し、中に飯を盛りて神に献ず。是をひらての御供えと称す。(中略) 葉碗、葉手といへる器なるべし。

と記されている。後者は鎮魂祭の様子を記し、其御儀もつとも嚴重なり。神供の品々多かる中に葉碗の御供えといえるあり。其製榲葉を八枚。細き竹を持って編みつけ折敷のかわりとし。中に飯を盛りて供ふ

とされ、ここにも挿図が付く (図 5-3)。春日祭は藤原氏の祭礼だが勅使が派遣され、鎮魂祭は新嘗祭の前日の儀式として知られている。引用した史料は近世まで下がるが、いずれも伝統を重視した公式行事の記録である。

この他、吉田神社の社家である鈴鹿家に伝えられた江戸時代の歴代天皇の大嘗祭に関する史料群が紹介されているが (鳥越他 1990)、実物資料として箱書きに「大嘗会御饌窪手枚手之

*『日本国語大辞典』(第二版、小学館、1976年)は、「くぼて」や「ひらで」が、柏などの葉を綴った容器で、後世では土器も含むと説明する。漢字表記では「くぼて」に「窪手」「葉碗」、「ひらで」に「枚手」「葉手」「葉盤」としている。この他にも辞典類を検索したが、ほぼ同様の内容であった。なお、参考までに確認した辞典類を列挙する。『大辞典』(平凡社、1936年)、『広辞苑』(第二版、岩波書店、1955年)、『新編大言海』(富山房、1956年)、『岩波古語辞典』(机上版、岩波書店、1974年)、『広辞林』(第5版、三省堂、1976年)、『大辞泉』(小学館、1995年)、『角川古語大辞典』(角川書店、1999年)

形」とある葉椀と葉盤の形見本が含まれている。同書には写真も掲載されており、『兼霞堂雑録』の葉碗や『晴翁漫筆』の葉盤と類似した形状が観察できる。

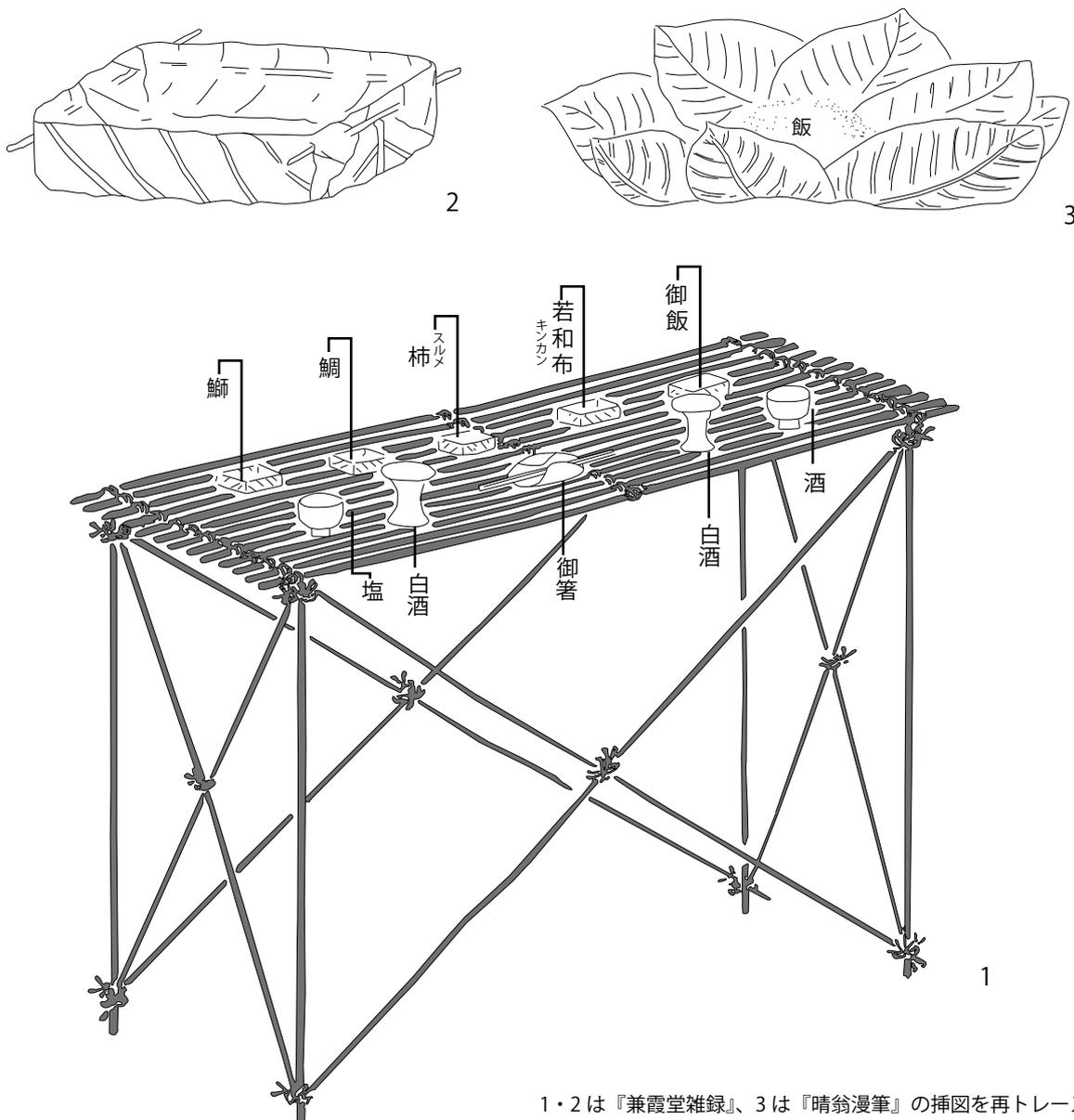
5. 木葉状線刻（木葉圧痕）の性格

川出清彦氏は神饌を散供御饌、饗応御饌、供覧御饌に大別し、饗応御饌をさらに葉盤御饌、台盤御饌に細分している。このうち葉盤御饌の事例に新嘗祭などをあげ、(伊勢)神宮もこれに含まれるとするが、根拠に『止由気宮儀式帳

(延暦 23 (804) 年)』の「御枚手五十六枚 (中略) 御枚手合千二百六十枚」の記述に注目している。

一方、さらに年代は下がるが、同じ(伊勢)神宮の『神宮明治祭式 (明治 8 (1875) 年)』では巻十七に「日別朝夕大御饌品目」、巻十八に「年中大御饌品目」が描かれている。ここで注意したいのは、ほとんどの品目が明黄褐色の容器に広葉樹の葉を敷いた上に盛りつけられている事である。供物はかなり写實的に表現されており*、容器も同様と考えるのであれば、土

* 西尾市岩瀬文庫で原典を確認した。



1・2は『兼霞堂雑録』、3は『晴翁漫筆』の挿図を再トレース
図5 葉椀・葉盤

師器が使用されていると考えられる。

こうした『神宮明治祭式』に見る土師器に木葉を敷く作法は、『止由気宮儀式帳』の系譜を引くものと想定でき、前述した吉岡氏の指摘を補足する事ができる。同様に本稿の主題となる線刻・圧痕資料も、線刻や圧痕を加える事により通常容器を祭祀具に転化させた、木葉そのものを使用しない葉椀・葉盤と理解しておきたい。もともとは木葉製の容器であったものが、土器の上に木葉を敷くスタイルや、木葉の線刻・圧痕を施す容器を使用するスタイルへと変化しているのであろう。

6. まとめ

次に、八巻古窯群の資料には時期幅が存在する事に注目すると、木葉状線刻（木葉圧痕）を施す祭祀具が繰り返し生産されていた事になる。しかし、これらは伝統的な葉椀・葉盤に御饌を盛る祭礼そのものではなく、在地領主層などが施主となり変容を遂げたものであった可能性が高い*（吉岡 1994）。根拠として八巻古窯群が碗・小碗を集中的に生産する在地消費を志向した生産内容である事をあげておく。さらに、八巻古窯群と類似した木葉状線刻（木葉圧痕）を施す碗がほぼ同時期の他地域の山茶碗窯にも存在することは、やや個性化した葉盤御饌を伴

* この動きは新興勢力の台頭と、他方では（宮地 1984）が指摘する様に、律令体制の斜陽化に伴い、式内社ですら新たな基盤が必要となっていた事も注目できる。

う祭祀が当地域において 12 世紀頃にある程度広域に存在していた可能性を示唆する。

一般的に、近世以前の神饌に関わる作法は秘儀とされる場合が多い。木葉状線刻（木葉圧痕）を施す山茶碗も同様で、詳細は明らかではない。窯跡以外の出土事例も県下では確認することができなかった。これらが生産地で使用された可能性も含めた検討が必要となるだろう。今後の課題となる。

謝辞

資料実見に際しては青木 修氏・伊藤正人氏・岡千明氏・黒田祐規子氏・増山禎之氏・山内伸浩氏らの手を煩わせた。記して、謝意を表したい。

追記

脱稿後に、豊田市金池 1～3 号窯資料に木葉状線刻（木葉圧痕）を施す碗が 3 点報告されている事に気付いた。実測図を観察すると、内底部に一葉の中央脈・側脈の一部が確認でき、全て圧痕と報告されている。時期は 12 世紀後葉～13 世紀初頭（山茶碗第 5 型式）となる。

なお、金池 1～3 号窯は豊田市本町金池に所在し、報告書は豊田市教育委員会により平成 26（2014）年に刊行されている（服部順子 2014『豊田市西部の山茶碗窯跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 57 集）。

参考・引用文献

- 愛知県住宅供給公社・瀬戸市教育委員会 1970 『菱野団地古窯趾群 - 瀬戸市の古窯第3集 -』
- 池本正明他 2013 『別岨古窯群』 愛知県埋蔵文化財センター
- 池本正明他 2016 『八巻古窯群』 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊野近富 1982 「「葉椀」「葉皿」考」『京都府埋蔵文化財情報』第5号 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
- 岩井宏實 2007 『神饌』 法政大学出版局
- 河合 潔 1976 「惣作14号窯」『惣作古窯址群』 田原町教育委員会
- 川出清彦 1978 『祭祀概説』 学生社
- 佐野 元 1998 「菱野丘陵窯跡群(上)」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第6輯 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 高橋照彦 1997 「「瓷器」「茶椀」「葉椀」「椀器」考」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集
- 田口昭二他 2001 『北小木』第二分冊 多治見市教育委員会
- 鳥越憲三郎他 1990 『大嘗祭史料 - 鈴鹿家文書』 柏書房
- 七原恵史他 1993 「長廻間古窯跡」『埋蔵文化財発掘調査報告 揚羽町古窯跡 NN302号窯・NN304号窯 長廻間古窯跡』
埋蔵文化財発掘調査報告24 名古屋市教育委員会
- 南里空海 2011 『神饌』 世界文化社
- 宮地尚一 1984 「大神宮信仰の通俗化」『伊勢信仰Ⅱ』民衆宗教史叢書第十三巻 雄山閣出版株式会社(「1963『神道史』下(一)理想社」の再収録)
- 山内伸浩他 1990 『明和古窯跡群発掘調査報告書』第二分冊 多治見市教育委員会
- 山内伸浩他 2001 「浜井場3号窯」『北小木』第一分冊 多治見市教育委員会
- 吉岡康暢 1994 「刻画文陶器の類型と性格(二)」『中世須恵器の研究』 吉川弘文館